



第5号
令和8年6月11日

国際教養科主任
水野豪人

国際教養科1年3組加藤夕月さんが、AIのフォーラムにパネリストとして参加！

5月24日(日)、千歳市にて「AI(人工知能)が描く未来、人間が創る未来」と題したフォーラムが開催されました。この先進的な学びの場に、本校から国際教養科1年3組の加藤夕月さんが進んで参加し、パネルディスカッションでは高校生としての意見を堂々と発信してくれました。国際教養科には、このように自ら視野を広げ、学外の間でも精力的に活躍している生徒がいます。皆さんも今回の加藤さんの体験やインタビューから多くの刺激を受け、日々の学びやこれからの社会との向き合い方について、ぜひ深く考えを巡らせてみてください。

特集インタビュー：

AIの時代を生きる私たちに必要な「人間らしさ」とは

~The summarized message of Ms.Kato~

- 日常的にAIを利用する中で、より深い付き合い方や活用法を学ぶためにフォーラムへ参加。
- AIには肉体がないため、最初の「ひらめき」と最後の「決定」は人間にしかできないと実感。
- 技術に依存せず、人間らしい感性やコミュニケーションを大切に生きる重要性を提示。

日常的な疑問からフォーラムへの参加へ

水野： それではインタビューを始めたいと思います。今回「AIが描く未来、人間が創る未来」というフォーラムに応募しようと思ったきっかけを教えてください。

加藤： 私は普段から、何気ない会話の相談相手や、勉強中に解説が載っていない問題を質問するなど、日常的にAIを活用しています。そのため、専門家の方々のお話を聞くことで、これからのAIの使い方を見直したり、自分自身の考えをより深めたりしたいと思ったのがきっかけです。

水野： 新しい可能性を秘めたテクノロジーですが、今後ともさらに利用頻度は増えそうですね。



加藤： 個人的に使う点ではかなり活用すると思いますが、最近のニュースやフォーラムでの議論を聞く中で、むしろ「過度には依存せず、一定の距離を保って付き合うこと」が大切なのではないかと考えるようになりました。あまり使いすぎるのはよくないと感じています。

AI社会がもたらす課題と「人間ならではの強み」

水野： それはどういうことでしょうか。もう少し詳しく聞かせてください。

加藤： AIに依存しすぎて周囲の人とのコミュニケーションが減少し、社会的な対話の場が失われていくのではないかと懸念をフォーラムで学び、深く共感しました。人間同士の関わりが薄れることで、人間ならではの魅力が損なわれ、結果として世の中の役割や仕事が奪われていくのではないかと感じたのです。

水野: 今回、専門家の方々のご講演から、どのような学びや発見がありましたか。

加藤: 参加する前は、AIの方が人間より優れているのではないかと考えていました。しかし、講演の中で「AIには肉体がない」というお話を聞き、ハッとさせられました。肉体がないAIには、感覚やインスピレーションといった「人間的なもの」を感じ取ることができません。私たちはそうした感性を活かして生きていくべきであり、これこそが人間とAIの根本的な違いなのだ学びました。

水野: 「特定の仕事がAIに奪われる」というようなお話はありましたか。

加藤: 将来奪われると予測されている仕事であっても、結果的には奪われないという解説がありました。なぜなら、AIに入力する最初の「ひらめき」と、AIが作ったものを最終的に「決定する役割」は、どちらも人間にしかできないからです。途中のプロセスで効率的な案を出すことはAIの得意分野ですが、最初と最後を人間が担う以上、完全に仕事が奪われることはないという視点を知り、とても安心しました。

即興のディスカッションと、AI音声への違和感

水野: その後、パネルディスカッションが行われ、本校からも加藤夕月さんと普通科3年の佐々木諒大君が参加しました。そこでの感想や気づきを教えてください。

加藤: 即興で質問されたことに対して、自分の中で瞬時に要約し、周囲に分かりやすく伝えることの難しさを痛感しました。それでも、言葉に詰まることなく発言できたことは、自分にとって大きな自信につながる良い経験となりました。

水野: ディスカッションの中で、加藤さんはどのような意見を述べたのですか。

加藤: 私はどちらかといえば、AIの普及に対して慎重・否定的な立場から意見を述べました。最近、地上波のCMなどでAIが生成した音楽やイラストをよく目にしますが、どこか拒絶反応や嫌悪感を抱いてしまうことがあります。その疑問をぶつけたところ、登壇者の方が「それは、AIが人間に近づいているようでどこか現実的ではない部分を、人間が本能的に感じ取っているからであり、必然的な反応だ」と答えてくださり、自分の中の違和感の理由が腑に落ちました。

水野: ニュースなどでもAI音声が入り込んでいますが、今後さらに増えていくのでしょうか。

加藤: 労働力不足や人件費削減の観点から、今後も代用

される割合は増えていくと思います。しかし、現在の技術ではまだ発音に不自然さがあり、大切なニュースの内容よりも音声の違和感に意識が向いてしまいます。情報の正確な伝達が求められる場において、現状のAI音声の多用は少し不適切ではないかと感じます。

国際教養科での2ヶ月と、これからの決意

水野: 入学してまだ2ヶ月というタイミングで、素晴らしい積極性ですね。これまでの教養科での学校生活を振り返ってみていかがですか。

加藤: 私はもともと英語が好きで国際教養科に入学しました。中学校の時はクラスで一番英語が得意な自負がありました。教養科に入ってみると、周囲は英語が得意なことが当たり前という環境でした。それぞれ発音、文法、海外文化など強みが異なり、先輩方のSDGs集会での発表を見ても、英語力・内容ともにレベルの高さに圧倒されました。だからこそ、「現状に満足せず、もっと上を目指したい」という強い向上心が芽生えました。

水野: それでは最後に、クラスメイトや学科の仲間たちに向けてメッセージをお願いします。

加藤: 私はこのフォーラムに参加したことで、AIに対する視野が大きく広がり、日頃の疑問を専門家の方々に直接解消してもらおうという、かけがえのない経験ができました。「時間がないから」と諦めてしまうのはもったいないです。少しでも興味のあるイベントやフォーラムがあれば、躊躇せずにぜひ一歩を踏み出して参加してみてくださいと思います。

水野: チャンスを自ら掴みに行くことの大切さが伝わってきますね。今日は貴重なお話をありがとうございました。

加藤: ありがとうございました。

